

感情のロゴス・理性のパトス

——フッサールの倫理学史とフッサール倫理学の可能性——

吉川 孝

本稿は、倫理学史についてのフッサールの講義を手がかりとして、フッサール倫理学の特徴を明らかにし、彼の倫理思想を紹介すること目ざしている。それに先立って、フッサール倫理学の研究意義やその現状を確認したい。

1. フッサール倫理学研究の意義

これまで現象学派のなかでは、M. シェーラーの倫理思想が20世紀を代表する倫理学説として認知されているのに対して、フッサールの倫理思想は、フッサール研究者のあいだでもそれほど大きな注目を集めることがなかった。たしかに、シェーラーが『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』¹（1913/16年）という大著を公刊し、倫理学史に不動の地位を占めたのに対して、フッサールは倫理学関連の体系的著作を執筆したわけではない。フッサール倫理学の研究に際しては、まずはこの事実を重く受け止めなければならないだろう。

フッサール研究においては、フッサールの草稿の断片を恣意的に組み合わせ、生の哲学者、身体哲学者、無意識の哲学者、論理主義者、実在論者……などのさまざまなフッサール像を築くことができるし、これまでも一部にはそうした研究が行われている。そのような研究にも、フッサールのテキストの潜在的可能性をひきだすものとしてのそれなりの存在意義を認めることができる。しかし、引用されるテキストの見解が、フッサールが最終的に承認したものであるかどうか、フッサール現象学全体（とりわけ公刊された著作、論文など）に対してどのような関係をもつかなどを検討しない研究は、少なくともフッサール文献学としての学術性を放棄したものと看做ざるをえない。たしかに、フッサールのテキストのつじつまあわせに終始する研究は、フッサール現象学の事象分析としての、哲学理論としての可能性を矮小化してしまうだろう。それゆえ、フッサール現象学に特有の「事象分析」の可能性は尊重されるべきであり、事象を顧慮しない文献学が学術的価値をもつことはない。しかし、事象分析と称する研究の価値は、事象の解明の進展具合によって評価されるべきであり、例えばフッサールと同時期の、さらには現代の心理学や生理学や認知科学などの成果を踏まえる必要があるため、フッサール研究という体裁に収まるべきではないだろう。こうしたことを考えると、学術的価値をもつフッサール研究の具体像が明らかになる。フッサール研究は、『論研』、『イデーン I』、『FTL』、『デカルト省察』、『危機』などの著作やその他の公刊された論文を

※『論理学研究』は『論研』、『純粹現象学及び現象学的哲学のための諸構想』は『イデーン』、『形式論理学と超越論的論理学』は『FTL』、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』は『危機』と略記する。

¹ Scheler, Max: *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik*. Gesammelte Werke Band 2, Francke, 1980.

重視したうえで、それらの見解の成立背景やそこで残された問題への取り組みの確認の作業として、講義や草稿群に目を通さなければならない。

こうした研究方針を採用するときに、フッサールが倫理学関係の著作を執筆しなかったという事実が、文献研究としてのフッサール倫理学への取り組みの意義を疑わしいものとするかもしれない。たしかに、草稿から感情や行為の事象分析をひきだすだけの研究がどれだけの学術性をもつか疑わしいにしても、フッサール倫理学の研究は、次のいくつかの点において積極的な意義を見いだすだろう。

1. 『FTL』『デカルト的省察』『危機』では、「自律」(I, 47; VI, 273) や「自己責任」(I, 47; VI, 200; 272; XVII, 9; 285) という倫理学的概念に言及される。これらの発想の意味は、倫理学研究という観点から明らかにされねばならない。
2. 『改造』論文 (XXVII, 3-94) は、その一部が日本の機関紙に発表されており、その中心テーマが「実践理性の学問としての倫理学」である。これまでのフッサール研究で重視されなかったこのテキストは、フッサール倫理学の研究によって正当に位置づけられるであろう。
3. 『論研』の表現論、『イデー I』のノエマ論、『FTL』の明証論、『デカルト的省察』の還元論、『危機』の生活世界論など、主要著作の主要問題は、倫理学や実践哲学の問題を背後にかかえている。それゆえ、フッサール倫理学研究は、これらのテキストの背景や問題意識を明らかにする役割を負っている。
4. 『イデー II』の第 3 篇「精神的世界の構成」の人格論は、フライブルク時代の倫理思想と密接な関連をもつために、『イデー II』の頓挫の帰結を正当に評価するためにも、フッサール倫理学の研究は必要である。
5. F. ブレンターノの影響化で形成されたフッサール倫理学は、20 世紀初頭のドイツの「現象学派の倫理学」の一翼を担うものである。ブレンターノを起源として G. E. ムーアによって継承される英米の分析哲学とは別に、シェラー、フッサール、A. プフェンダー、A. ライナッハ、D. ヒルデブラント、N. ハルトマン、R. インガルデン、H. ライナーらによって形成される現象学的倫理学の内実は、フッサール倫理学研究を通じて照射されることになるだろう。
6. フッサール倫理学の発展は、メタ倫理学の用語で表現するならば、「情緒主義」(『論研』) から「認知主義 (的実在論)」(『イデー I』) を経て、ある種の「徳の倫理学」(『改造』論文) へといたる変貌を示している。そこでのメタ倫理的考察は、意識の記述的分析による志向性の現象学的解明において、それぞれの倫理学説がかかえるメリットやデメリットを浮かび上がらせることになる。
7. フッサール倫理学は、「実践理性の現象学的解明」というモチーフによって導かれているため、その研究は、フッサール現象学全体を「理性論」として読み解くことに通じる。この観点からの研究によって、フッサールの哲学の発展が、「理論理性の優位」から「実践理性の優位」への過程という意味を帯びることになる。

2. フッサール倫理学研究の現在

フッサールの倫理思想については、これまで何人かの研究者によって、未公刊草稿をも視野に入れた体系的研究がなされている。この分野での先駆的業績となるのは、1960

年に発表された A. Roth の『エドムント・フッサールの倫理学研究』²である。この研究書は、フッサールの倫理思想が全く知られていない時代に、フッサール倫理学関連の資料の全体を概観したものである。そのテキストの読解は正確であり、いまなおフッサールの倫理思想の全体像を知るうえで欠かすことのできないものである。とりわけ、フッサールが歴史上の倫理学説に対してとっていた立場に言及しながら、フッサールの倫理思想を追ったものとして、他の文献にはない特徴をもっている。しかし、Roth の研究は、次の二つの点で限界をもっている。第一に、フッサールの倫理思想の発展における時代区分を行っておらず、ゲッティンゲン時代(1901-1916年)とフライブルク時代(1916-1926年)とのかなり異なった二つの立場を混同している。第二に、Roth の研究は、基本的には未公開の講義や草稿に限定されているため、フッサールの倫理思想が公開された著作や論文(さらにはフッサール現象学全体)とどのように関連するのかが示されていない。これらの点から、Roth の研究は、フッサール研究全体に対して、それほど大きな影響力をもつことはなかった。

1989年以降は、U. Melle がフッサールの倫理思想に関する一連の論文を発表し、この分野の研究に飛躍的な発展をもたらした³。Melle の最大の功績は、フッサールの倫理思想を「ゲッティンゲン倫理学」と「フライブルク倫理学」とに区分し、その相違を指摘した点である。ゲッティンゲン倫理学は、ブレンターノの影響化にあり、理論的意識との類比のうえに情緒的・実践的意識の合理的な機能様式を考察するとともに、「形式的論理学」に平行する「形式的倫理学」の根拠づけを目指している。これに対して、フライブルク倫理学は、J. G. フィヒテの影響化にあり、ゲッティンゲン時代の合理主義を批判的に克服することで、人格的生の愛の概念を重視する。フッサールの倫理学関連のテキストの編集者でもある Melle の研究は、未公開草稿を引用しながら、フッサール倫理学の時代的发展をかなり正確に特徴づけるものであり、資料としても一級の価値をもっている⁴。しかし、その研究にも、とりわけフライブルク倫理学の特徴づけについて問題点が見いだされる。というのも、Melle は、フッサールが一貫して実践理性の学問としての倫理学を構築しようとしたことの意味を見落としているからである。たしかに彼の研究は、フッサールの倫理学(とりわけゲッティンゲン倫理学)が理論的、実践的、評価的理性という複数の理性様式の問題と関連することを正確に指摘している。しかしながら、フライブルク倫理学をゲッティンゲン倫理学の「合理主義・理性主義の克服」

² Roth, Arois: *Edmund Husserls ethische Untersuchungen*, Kluwer, 1960. アーロイス・ロート『エドムント・フッサール倫理学研究——講義草稿に基づく叙述——』藤本正久・桑野耕三訳、北樹出版、1982年。

³ Melle, Ullrich: *Zu Brentano und Husserl Ethikansatz. Die Analogie zwischen den Vernunftarten, Brentano- Studien 1*, 1989. *Objektivierende und nicht-objektivierende Akte, Husserl-Ausgabe und Husserl-Forschung*, Kluwer, 1990. *The Development of Husserl's Ethics, Etudes phenomenologiques 13-14*, 1991. *Husserls Phänomenologie des Willens, Tijdschrift voor filosofie 54*, 1992. *Selbstverwirklichung und Gemeinschaft in Husserls Ethik, Polithik und Theologie, Tijdschrift voor filosofie 57*, 1995. *Edmund Husserl: From Reason to Love, Phenomenological Approaches to Moral Philosophy A Handbook*, Kluwer, 2002. *Husserls Personalistische Ethik, Fenomenologia della ragion pratica, L'Etica di Edmund Husserl*, Binliopolis, 2004.

⁴ Melle, Ullrich: *Einleitung des Herausgebers, Husserliana Band XXVIII*, Kluwer, 1988. *Einleitung des Herausgebers. Edmund Husserl, Wert des Lebens. Wert der Welt. Sittlichkeit (Tugend) und Glückseligkeit <Februar 1923>*, *Husserl Studies 13*, 1997.

と見なそうとするために、フライブルク倫理学において到達されたフッサールに特有の理性概念（とりわけ実践理性の概念）の明確化に失敗している。例えば、「理性から愛へ」（2002年）という論文のタイトルは、フライブルク倫理学が実践理性の現象学的定式化を放棄したかのような印象を与えている。そのため、愛の思想家と呼ばれるシェーラーの人格主義的倫理学に対するフッサール倫理学の独自性も、そこでは明示されていない。フッサール現象学の全体を「理性論」として読み解くような視座からすれば、ゲッティンゲン倫理学からフライブルク倫理学への移行は、前者の主知主義・理論理性の優位が解体され、実践理性の優位の立場が確立されるプロセスである。したがって、フッサール現象学はいかなる意味でも理性論であることをやめていないのであって、Melleは主知主義の克服と理性論の放棄とを混同していると言わざるをえない。

このほかにも、注目すべきものとして、以下のような先行研究がある。H. R. Seppは『プラクシスとテオリア：フッサールの生の超越論的現象学的再構築』⁵において、フッサール現象学における「実践」と「理論」の関連をめぐる問題に体系的に取り組んでいる。その中心的な主題は、「自然的態度」と「超越論的態度」の関連において哲学的営為の実践的意味を明らかにすることであり、狭義でのフッサール倫理学の研究ではない。しかし、その議論は、フッサール倫理学の内実を踏まえたものであり、20年代後半からのフッサール倫理学が「神学的」「形而上学的問題」に収斂されることをいち早く指摘している。こうした研究は、現象学的還元をフッサールの倫理学との関連において解明するうえで示唆を与えるものとなるであろう。また、J. G. Hartは、『人格と共同の生 フッサール社会倫理学の研究』やそのほかの論文で、フッサール倫理学をふまえた研究を展開している⁶。その研究は、フッサール倫理学の研究に限定されることなく、フッサールの実践哲学が共同体、宗教、神などの概念と強い結びつきをもつことに着目しており、フッサールの社会哲学や哲学的神学への展望をも与えてくれる。

このほかにフッサール倫理学を主題とする著作として、次のものを挙げることができる。C. Spahnは『現象学的行為論：倫理学のためのエトムント・フッサールの研究』⁷（1996年）において人格論という観点から、T. Cobetは『フッサール、カント、実践哲学：道

⁵ Sepp, Hans Rainer: *Praxis und Theoria Husserls transzendentalphänomenologische Rekonstruktion des Leben*, Alber, 1997.

⁶ Hart, James G.: *The Person and the Common Life: Studies in a Husserlian Social Ethics*, Kluwer, 1992. A Precise of Husserlian Philosophical Theology, Albany: SUNY, 1986. Constitution and Reference in Husserl's Phenomenology of Phenomenology, *Husserl Studies* 6, 1989. I, We, and God: Ingredients of Husserl's Theory of Community, *Husserl-Ausgabe und Husserl-Forschung*, Kluwer, 1990. Axiology as the Form of Purity of Heart: A Reading of "Husserliana XXVIII", *Philosophy Today* 34, 1990. Entelechy in Transcendental Phenomenology: A Sketch of the Foundation of Husserlian Metaphysics, *American Catholic Philosophical Quarterly* 66/2, 1992. The entelechy and authenticity of objective spirit: Reflections on Husserliana XXVII, *Husserl Studies* 9, 1992. Phenomenological Time: Its religious Significance, *Religion and Time*, Leiden, 1993. The Study of Religion in Husserl's Writing, *Phenomenology and the Cultural Disciplines*, Kluwer, 1994. Husserl and Fichte: With special regard to Husserl's lectures on "Fichte's ideal of humanity", *Husserl Studies* 12, 1995. The Summum Bonum and Value Wholes: Aspects of a Husserlian Axiology and Theology, *Phenomenology of values and valuing*, Kluwer, 1997. The absolute ought and the unique individual, *Husserl Studies* 22, 2006.

⁷ Spahn, Christine: *Phänomenologische Handlungstheorie Edmund Husserls Untersuchungen zur Ethik*, Königshausen und Neumann, Würzburg, 1996.

徳性と自由の分析』⁸ (2003 年) においてカント倫理学との比較考察という観点から、J. Donohoe は『フッサールにおける倫理と相互主観性：静態的現象学から発生的現象学へ』⁹ (2004 年) において発生的現象学との関連という観点から、それぞれフッサールの倫理思想に本格的に取り組む研究を行っている。また、N. Lee も『フッサールの衝動の現象学』やその他の論文で、衝動や感情などの倫理学と関連する主題を扱っているほか、ゲッティンゲン時代からフライブルク時代へのフッサール現象学の発展を実践哲学化と見なす視座を提供している¹⁰。その他の研究者では、ノエマ論で知られる J. J. Drummond や『フッサール、ハイデガー、意味の空間』¹¹の著者 S.G.Crowell や形式存在論の研究で有名な K. Mulligan などのフッサール研究を牽引する研究者も、フッサール倫理学に関する論文を発表している¹²。

このような個人の研究者のほかにも、現象学派の倫理学に関する論文集が刊行されており、そこにはフッサール倫理学に関する論文が収められている。1997 年には、*Phenomenology of Values and Valuing* (Kluwer) が、2002 年には、*Phenomenological Approaches to Moral Philosophy: A Handbook* (Kluwer) が、2004 年には、*Fenomenologia della ragion pratica. L'etica di Edmund Husserl* (Binliopolis) が出版されており、フッサール倫理学を研究した論文も収められている。

海外から日本に眼を転じて、著作や論文などによって、幾つかのフッサール倫理学の研究が進展している。遠藤孝は『現象学的価値倫理学——現象学的倫理の価値序列——』(理想社、1973 年) において、深谷昭三は『現象学と倫理』(晃洋書房、1991 年) において、ともに Roth の研究書を参照しながら、フッサール倫理学の研究に取り組んでいる。Roth に依拠することのない研究としては、ゲッティンゲン倫理学に関する研究が、森村修¹³、堀栄造¹⁴によって、カント倫理学との比較考察が工藤和男¹⁵によって展開

⁸ Cobet, Thomas: *Husserl, Kant und die Praktische Philosophie. Analyse zur Moralität und Freiheit*, Königshausen und Neumann, 2003.

⁹ Donohoe, Janet: *Husserl on Ethics and Intersubjectivity: From Static to Genetic Phenomenology*, Humanity Books, 2004.

¹⁰ Lee, Nam-In: *Husserl's Phänomenologie der Instinkte*, Kluwer, 1993. Edmund Husserl's phenomenology of mood, *Alterity and facticity New perspectives on Husserl*, Kluwer, 1998. Practical Intentionality and Transcendental Phenomenology as a Practical Philosophy, *Husserl Studies* 17, 2000. しかし Lee は、静態的現象学から発生的現象学への転換という旧来のフッサール解釈の図式に依拠するため、実践理性の現象学の深化がフッサール現象学の倫理的転換を招いたことを指摘できていない。

¹¹ Crowell, Steven Galt: *Husserl, Heidegger, and the Space of Meaning: Paths Toward Transcendental Phenomenology*, Northwestern University Press, 2001.

¹² Drummond, John. J.: Moral Objectivity: Husserl's Sentiments of the Understanding, *Husserl Studies* 12, 1995. Respect as a Moral Emotion: A Phenomenological Approach, *Husserl Studies* 22, 2006. Crowell, Steven Galt: Phenomenology, Value Theory, and Nihilism, *Edmund Husserl Critical Assessments of Leading Philosophers* V, Routledge, 2005. Mulligan, Kevin: Husserl on the Logics of Valuing, Values and Norms, *Fenomenologia della ragion pratica, L'Etica di Edmund Husserl*, Binliopolis, 2004.

¹³ 森村修、「形式的倫理学としての純粋倫理学——フッサール倫理学の一断面——」、『倫理学年報』、1990 年。

¹⁴ 堀栄造、「フッサールの倫理学——一九一四年の「倫理学および価値論についての根本問題に関する講義」に基づいて——」、『大分工業高等専門学校研究報告』、第 28 号、1992 年。「フッサールの倫理学の根本概念——分別性の概念——」、『大分工業高等専門学校研究報告』、第 29 号、1993 年。

¹⁵ 工藤和男、「フッサール倫理学とカント批判」、『文化学年報』、第 49 輯、同志社大学文化学会、2000 年。

されている。また、水谷雅彦がはやくからフッサールの倫理思想に注目しているほか¹⁶、実践哲学の問題に焦点をあててフッサール現象学全体を理性論として読み解く研究が、吉川孝によって進められている¹⁷。第5回フッサール研究会のシンポジウムのテーマが「フッサールと実践理性」¹⁸であったことも注目されるべきであろう。

このような研究の展開を支えているのは、80年代の後半からつぎつぎとフッサール倫理学に関連する新しい資料が刊行されたことである。Husserliana（フッサール著作集）としては、1988年にゲッティンゲン時代の講義を取めた第28巻『倫理学と価値論についての講義（1908-1914年）』¹⁹、89年には『改造』論文の全体が取められた第25巻『論文と講演』²⁰、2002年には20年代初頭の講義や講演が取められた第35巻『哲学入門』²¹、2004年にはフライブルク時代の講義を取めた第37巻『倫理学入門』²²が刊行された。さらには97年には、『フッサール研究』誌に、「生の価値、世界の価値、徳（人倫）と幸福」²³草稿が発表されている。さらに刊行予定のものとしては、『心情と意志、「意識の構造の研究」からのテキスト』、『現象学の限界問題』があり、前者は感情や意志の志向性の具体的分析として、後者は倫理学の延長線上にある目的論や神学の問題を検討する資料として、貴重なものとなるだろう²⁴。

3. 倫理学史とフッサール——感情の合理性の探求

歴史上の倫理学説に対するフッサールの立場を確認しておくことは、彼の倫理思想の内実を明らかにするためにも、現象学派的倫理学との関係を知るためにも、重要な意味をもつだろう。1902/03年の「倫理学の根本的問い」講義では、フッサール自身による現象学的倫理学は展開されていないが、近代の倫理思想に対する明確なスタンスが表明されている。そこでは、近代のイギリスを舞台に行われた「悟性道徳」（R. カドワーズ、

¹⁶ 水谷雅彦、「エートスの現象学と現象学のエートス—フッサール現象学における人間主義と拡大主義」、『現象学と倫理学』、日本倫理学論集27、1992年。

¹⁷ 拙論、「哲学の始まりと終わり——現象学的還元の動機をめぐって——」、『フッサール研究』、第3号、平成16年度科学研究費補助金（基礎研究B-1）研究成果報告書（課題番号14310003）、2005年。「志向性と創造——フッサールの意志の現象学」、『倫理学年報』、第54集、日本倫理学会、2005年。「フッサール現象学の倫理的転換——『ロゴス』論文から『改造』論文へ——」、『可能性としての実存思想』、実存思想論集XX、実存思想協会、2006年。「問いの現象学——フッサール、ダウベルト、ライナッハをめぐって」、『現象学年報』、第22号、日本現象学会、2006年。「志向性と自己創造——フッサールの定言命法論」、『倫理学年報』、第56集、日本倫理学会、2007年（予定）。「フッサールにおける生の浄福——感情の現象学のために」、『哲学』、第58号、日本哲学会、2007年（予定）。

¹⁸ 提題・村田憲男、「自由のメディアとしての身体」、吉川孝、「感情のロゴス・理性のパトス——フッサールによる定言命法の現象学的解釈をめぐって——」、コメンテーター・榊原哲也、村上靖彦、司会・浜渦辰二、2006年3月18日、大学セミナーハウス。

¹⁹ *Vorlesungen über Ethik und Wertlehre(1908-1914)*. Kluwer, 1988.

²⁰ *Aufsätze und Vorträge(1922-1937)*. Kluwer, 1989.

²¹ *Einleitung in die Philosophie Vorlesungen 1922/23*. Kluwer, 2002.

²² *Einleitung in die Ethik Vorlesungen Sommersemester 1920/24*. Kluwer, 2004.

²³ Husserl, Edmund: Wert des Lebens. Wert der Welt. Sittlichkeit (Tugend) und Glückseligkeit<Februar 1923>, *Husserl Studies* 13, 1997.

²⁴ *Gemüt und Wille. Texte aus den Studien zur Struktur des Bewusstseins, Grenzprobleme der Phänomenologie* とともに Husserliana として Springer 社から刊行される予定である (Mitteilungsblatt für die Freunde des Husserl-Archivs Nr.29, 2006, Website: <http://www.hiw.kuleuven.be/hiw/eng/husserl/>)。

S. クラークら)と「感情道徳」(シャフツベリー、F. ハチソンら)の論争が取り上げられている。一方の「悟性道徳主義者たち」によれば、善悪などの倫理的概念は、感性ではなく、悟性にその起源をもっているとされる。「善は、真正な意味での善は、真理と同じように絶対的な規範である」(XXVIII, 386)ため、彼らは「規範性を平均性へと関係づけることに満足しない」(XXVIII, 389)のである。この場合には、経験的で偶然的なものにとどまる「感情」ではなくて、真理に関係しうるような「悟性」が、善に対する源泉とならねばならなくなる。他方の「感情道徳主義者たち」によれば、善悪の起源となるのは、悟性ではなく、感情である。「感じ、欲望し、意志するあらゆる能力をもたないような、知覚と思考をする存在を虚構するならば、そうした存在にとって、『善』『悪』や価値と無価値、徳とという言い方はその意味を失うことになる」のであって、「感情」こそが、善悪にかかわる「倫理的区別」に本質的に関与している(XXVIII, 391)。

このような対立にあつて、フッサールは感情道徳と悟性道徳の双方に一定の成果を見いだそうとする。悟性道徳の成果としては、次のことが指摘される。

われわれはただ、理性的判断と事後的判断という対立だけを、アプリアリとアポステリアリという区別を手にしてしている。理性道徳主義者が視野に収めていたのは、こうした意味において道徳的なものの起源が理性にあるという言い方であった。それゆえ、彼らは倫理学と数学とをつねに平行関係においていたのである(XXVIII, 395)。

ここでは、悟性道徳が道徳の起源を何らかの「アプリアリなもの」「理性」のうちに見いだしたことに積極的な意義が見いだされている。というのも、善が規範であるかぎり、それは経験的事実に還元されてはならないためである。

これに対して、感情道徳の成果としては、次のことが指摘される。

感情道徳が示したことは、感情活動、感情が〔倫理的概念の〕源泉を与えるということである(XXVIII, 394)。

ここではこうした立場に加担したうえで、「感情が捨象されているならば、『善』『悪』という言い方はされないことは自明である」(XXVIII, 394)とも言われ、善悪を何らかの感情との関連において考察する試みは、フッサールによつても肯定的に受け入れられている。

フッサールは近代の道徳哲学から、善悪の規範性や善悪と感情の結びつきという発想を積極的に受け入れながらも、悟性道徳と感情道徳の双方の立場への疑義を呈している。この疑義は、双方の立場が暗黙裡に前提にしている「感情」の「経験的性格」に向かつている。

道徳感情は経験的なものとして構成されねばならないのだろうか。道徳が感情に、感情活動性に根ざすことが、倫理的規範の厳密な一般妥当性や一般的拘束性の廃棄を必然的に帰結するということは、本当なのだろうか。このことはここで基本的な問いである。そうした帰結が自明であるという確信において、悟性道徳の代表者と

感情道徳の代表者は一致していた (XXVIII, 390)。

こうした「感情は経験的なものである」という確信ゆえに、悟性道徳は「一面的な主知主義」をかかげて、絶対的規範としての善悪の倫理的区別は、悟性によってなされると信じ、感情が倫理学の基礎づけに参与することを否定しなげばならなかった。道徳思想家は、感情のうちにある倫理的区別の起源を、あらゆる疑いを超えて高めることができると思ってしまう、倫理的経験論を証明済みのものと考え、倫理的規範の妥当性の意味を深く考察することがなかった (XXVIII, 390)。

このような悟性道徳の主知主義と感情道徳の懐疑主義とをめぐるジレンマから脱却するためには、感情のなかに何らかのアプリオリなものや合理性を認め、そこに善悪の源泉を見いださねばならない。実際にフッサールは、感情のアプリオリの探求の可能性を示唆している。

数学的法則はもちろんカテゴリーという意味での純粋な悟性法則である。しかし、この領域の外部にも、アプリオリな法則が存在しないだろうか。時間秩序や音系列における音の秩序などのアプリオリな法則が存在しないだろうか。感情や感情に根ざす概念の本性のうちにも、アプリオリな合法則性が根ざすことができないとでも言うのだろうか (XXVIII, 396)。

ここでは、数学のアプリオリと対比されて自然のアプリオリや感情のアプリオリが引き合いにだされている。これは、シェーラーもみずからの倫理思想の中核に据えた「感情の実質的アプリオリ」の発想であることがわかる。さらには次のようにも言われている。

諸々の真理の純粋な形式的連関……に関係するアプリオリな真理法則が真理に属しているように、価値の理念には、とりわけ道徳的価値の理念には、純粋に形式的な価値法則が属するだろう (XXVIII, 397)。

ここでは、論理学の形式的法則と類比的な価値論の形式的法則の探求可能性が指摘されている。このような形式的アプリオリを探求するという発想は、カントの形式主義を発展させた「形式的倫理学」として結実することになる。

『論研』の直後の 1902/03 年の段階において、フッサールは、歴史上の倫理学が感情と理性とを排他的に峻別したことを批判し、そのうえで、感情や価値の合理性の探求をみずからの倫理学の課題として掲げている。

4. 反省的感情の限界——シャフツペリー解釈をめぐって

フッサールは、感情の合理性をどのように探求したのだろうか。ゲッティンゲン時代には、フッサールは感情の合理性の探求モデルをブレンターノに見いだしている。もともとフッサールは 1884/85 年と 1885/86 年にブレンターノの「実践哲学」に関する講義を聴講したほか、1884/85 年にはブレンターノの演習にも参加して、ヒュームの『道徳

の原理』を購読している²⁵。1902/03年の講義での倫理学史へのスタンスの取り方がすでに布伦ターノを髣髴させるものであり、かつての布伦ターノとの交流が、フッサールの倫理思想の形成に大きな影響を与えたようである。しかも、『イデーニ I』においては、布伦ターノの『道徳的認識の源泉について』（1889年）を、「わたしが最大の謝意を捧げなければならないと感じている書物」（III/1, 323 Anm.）とも賞賛している。

布伦ターノは、善悪の起源を感情に見いだしながらも、感情を感性と同一視する経験論的立場から距離を置くことで、感情の合理性を追求している。布伦ターノによれば、アリストテレスが『形而上学』の冒頭で語った「知への欲求」は、感性的なものではない感情の一例であり、「それは、高次の形式の気に入ることであり、判断の領域での明証の類比体である」²⁶とされる。それゆえ、判断において何か「承認」や「否認」されるように、感情においても何か「愛され」たり、「憎まれ」たりする。しかもその愛や憎しみが感性的、盲目的なものではなく、明証的判断と類比的な合理性をもつ場合、それらは善悪の起源となりうる。そうした高次の感情においては、誰かが何かを愛するとき、その愛する振る舞いが適切であると内的に知覚されており、このような内的知覚の関与が重要な意味をもっている。「内的知覚においてのみ、われわれは、みずから何かを愛している、何かを憎んでいることを把握する」のであり、高次の愛や憎しみは、この内的知覚によって「適切」という性格づけを受けとる²⁷。ゲッティンゲン時代のフッサールは、このような発想を手がかりとして、感情にも認識と類比的な機能を、すなわち「対象への志向」、「明証」を通じた志向の「充実化」などの機能を強調している（XXVIII, 344）。それゆえ、感情も対象や事態を思念し、その思念を明証体験によって確証するのであって、このような働きのうちに感情の合理性が見いだされている。

ところが、感情の合理性の探求という同じモチーフに導かれながらも、フライブルク時代のフッサールは、布伦ターノやみずからのゲッティンゲン時代の立場に批判的になる。ここでは、1920/24年の講義のシャフツベリー解釈に注目したい²⁸。

フッサールは、シャフツベリーの道徳感情の理論に一定の評価を与えている。シャフツベリーは、「人間は反省的にみずからの傾向やその対象に目を向ける」ために「新たな情感、第二段階の情感が生じる」（XXXVII, 156）ことを知っていた。すなわちシャフツベリーは、感性的感情には限定されない高次の感情を発見して、道徳的判断と関連づけたのである。「心情のうちで、好むや好まないという反省情感という形態において、承認や否認する評定が生じる」（XXXVII, 156）というシャフツベリーの洞察からは、布伦ターノの学説（内的知覚、高次の感情など）との類似性が見いだされる。しかし重要なのは、「第二段階の情感」「反省情感」の学説の紹介に続いて、はっきりとした批判が表明されることであり、これは「高次の感情」の学説を掲げる布伦ターノへの批判にもなっている。

²⁵ Peucker, Henning: Einleitung des Herausgebers, *Husserliana Band XXVII*, Kluwer, 2004, S.xix;xxx.

²⁶ Brentano, Franz: *Vom Ursprung sittlicher Erkenntnis*, PhB. 55, Felix Meiner, 1969, S. 22.

²⁷ Brentano, Franz: *Grundlegung und Aufbau der Ethik*, PhB. 309, Felix Meiner, 1977, S. 144. この著作は、布伦ターノの1876年から1894年の講義（その一部をフッサールが聴講した）をもとに、1952年に出版されたものである。

²⁸ この講義には、他にもホップズの実践哲学やカント倫理学との対決という興味深い論点が見いだされるが、詳しい論述は別の機会に試みたい。

シャフツベリーは、素朴な段階の感情の単なる評定と、道徳性そのものが要請する自己評定とを混同している (XXXVII, 165)。

たしかにシャフツベリーの反省的感情は、盲目の衝動とは区別される反省的性格をもっている。「反省の能力なくしては徳という性格について語ることはできない」(XXXVII, 161) ことを洞察したのはシャフツベリーの功績である。しかし、そこでは、感情の判定能力を確保することがそのまま倫理学の問題の解決を意味するために、「自我としての自分自身による自我の特殊な規則づけ」がまったく顧慮されていない (XXXVII, 165)。フライブルク時代のフッサールにしてみれば、感情の反省能力の指摘だけでは、未来の自己の善き生の形成を検討する能力としての実践理性の解明には到達していない²⁹。「この高次の反省感情を現象学的分析にもとに置きいれ、その志向性を照射すること」が「きわめて重要な課題」(XXXVII, 160) であり、「自己創造」「自己規範化」(XXXVII, 164)、「自己規定」「自己教育」(XXXVII, 162)、「自己方向づけ」「自己形態化」「自己刷新」(XXXVII, 166) の営みが、現象学的志向性分析において解明されねばならない。実践理性というのは、単なる高次の感情より以上の機能をもっており、『改造』論文では、「自己創造」のとりわけ理性的な形態が「自己刷新」とも特徴づけられ、実践理性に基づく倫理的な生が現象学的志向性理論の枠組みで探求されている³⁰。

むすび——感情のロゴスから理性のパトスへ

フッサール倫理学は一貫して感情の合理性を探求しているが、ゲッティンゲン時代とフライブルク時代とではその内実が大きく異なっている。感情に認識と類比的な合理性を見いだすゲッティンゲン倫理学が「感情のロゴス」と特徴づけられるとすれば、理性の実践的・感情的性格を指摘するフライブルク倫理学は「理性のパトス」³¹と特徴づけられる。理性が、認識の機能に限定されるものでなく、生の満足を求めるある種の欲望であるという洞察が、フッサールの理性論の成果である。

²⁹ フッサールは、道徳判断と美的判断とを類比的に語るシャフツベリーの「唯美主義」(XXXVII, 166) を批判し、そこに実践理性の学説としての倫理学の欠如を見てとっている。

³⁰ この点については、前掲拙論、「志向性と自己創造——フッサールの定言命法論」を参照。

³¹ 理性のパトス的性格については、前掲拙論、「フッサールにおける生の浄福——感情の現象学のために」を参照。